

## 成務天皇 狹城盾列池後陵鳥居改築工事に伴う立会調査

成務天皇陵は、奈良県奈良市山陵町に所在し、垂仁天皇皇后日葉酢媛命狹木之寺間陵、称徳天皇高野陵とあわせて佐紀三陵と呼ばれている。当陵は前方後円墳であり、南にのびる低台地の西縁に南北方向に主軸を据えて築造されている。東側から西側への傾斜変換点にあたるため、墳丘の東と西裾では4 m以上の比高差があり、後円部と前方部の濠に渡土堤を設けて段差が解消されている点が特徴である。現長は約204 mである<sup>(1)</sup>。周囲をめぐる濠は南北の渡土堤により西濠（1号濠）と東濠（2号濠）に区画され、さらに東濠の南側には長方形の濠（3号濠）が確認される。

当陵において、木造鳥居の老朽化に伴い、鳥居が木造から石造へと変更されることになった。木造鳥居にはコンクリート製の基礎が設置されているが、石造鳥居の基礎としては使用することができないため、新規の基礎を設置する前に在来コンクリート基礎を撤去する必要がある。掘削の規模は長さ6.0m、幅3.0m、深さ1.5mである。鳥居は墳丘の南側に設置されており（第21図<sup>(2)</sup>）、掘削箇所が原初の遺構にあたる可能性があるため、立会調査を実施した。当工事の工期は令和元年11月14日～令和2年3月19日で、2月3日から陵墓調査室員と現地の監区職員立ち会いの下で掘削が開始され、在来基礎の撤去が終わって完掘したのち、2月7日まで記録化作業をおこなった。また、新規基礎設置後の埋め戻しがおこなわれた3月2日には現地の監区職員が立ち会った。調査は土屋隆史が担当し、中野裕樹、南彰治がこれを補助した。ここでは、掘削箇所の報告をおこなう。なお、今回の報告で使用する標高は、境界標識14号を84.34mとする昭和62年に修正作成された陵墓地形図のデータである。図面で使用している方位記号の方角は磁北である。

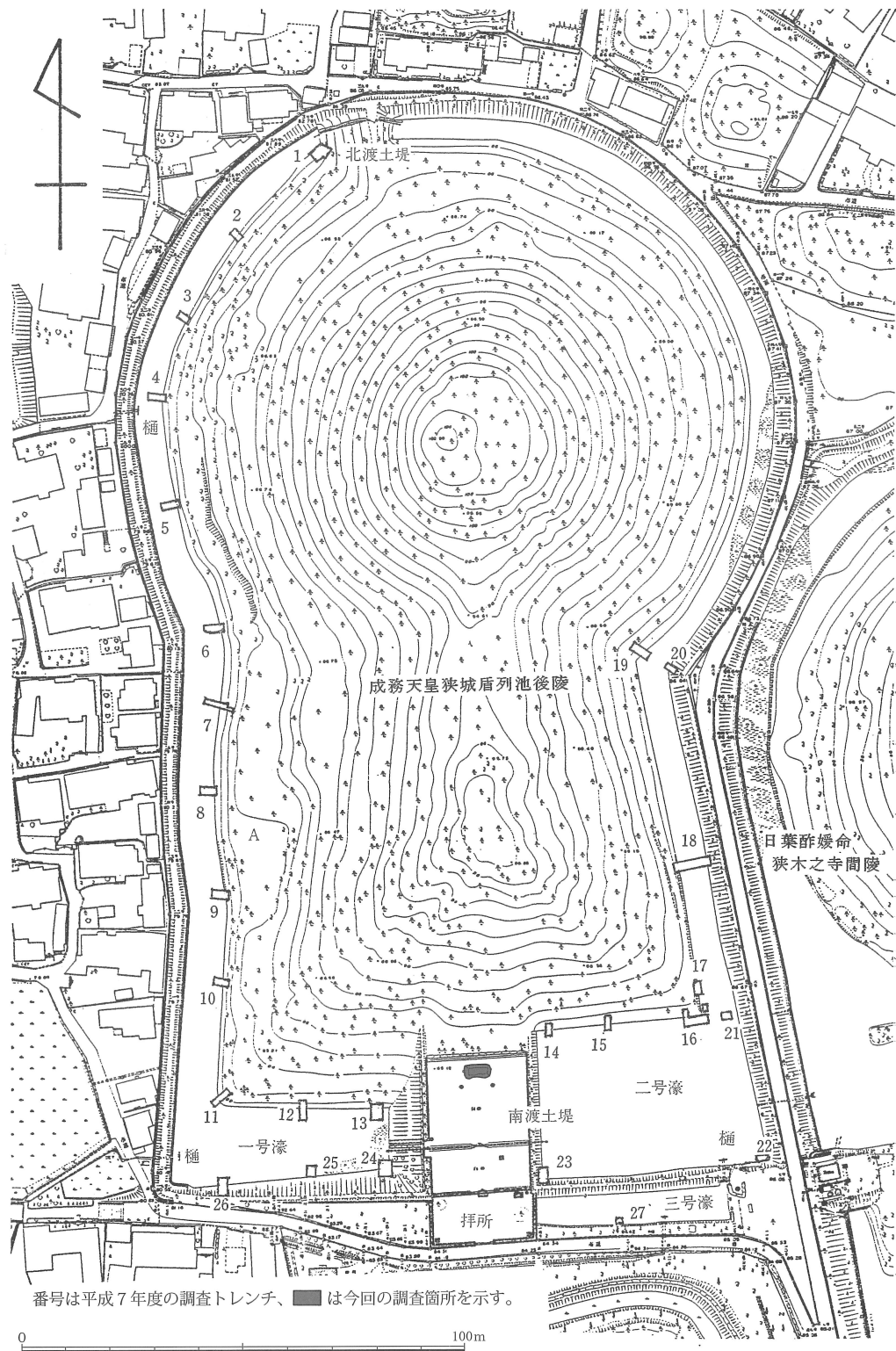
当陵における調査事例としては、昭和59年（1984）11月7日～12月1日にかけて、現地の監区職員によって実施された鳥居建替工事箇所の調査がある<sup>(3)</sup>。また、平成7年（1995）10月30日～11月29日にかけて、濠の護岸工事等の整備工事計画にともない、整備工事区域の事前調査が実施された<sup>(4)</sup>。今回の調査とかかわる部分の調査成果について、簡単に述べておきたい。南渡土堤の西側に設けられた第13、24トレンチ（第21図）からは、地山の上から築造当初よりも新しい時期の盛土（後世の盛土）が検出されており、南渡土堤の西裾部分が当陵の築造当初からのものではなく、後世の盛土によるものであるという<sup>(5)</sup>。一方、北渡土堤の第1トレンチからは原位置を保つ埴輪群と葺石が検出されており、築造当初からのものであるとされている。また、前方部正面西半部分に設けられた第12トレンチからは、地山の上から後世の盛土が検出されており、後世に前方部正面西半部分の濠が一旦埋められて濠幅が狭くなったと推定されている<sup>(6)</sup>。さらに、外堤に設けられたトレンチからも、地山の上から後世の盛土が検出され、大部分が後世の盛土によるものであることが示されている<sup>(7)</sup>。濠の中に設けられたトレンチからは、原初の濠内堆積土が確認されず、築造時に滞水されていた可能性はほとんどないという。このように、当陵の墳丘裾、南土堤、濠は築造後からその姿が大きく変わっていることがわかる。

掘削は、鳥居の基礎を埋め込むために必要な、長さ6.0m×幅3.0m×深さ1.5mの範囲でおこなった（第22図、図版13、14-1～4）。層序は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：鳥居掘方埋土、Ⅲ層：押所造成土、Ⅳ層：押所造成前に形成された土、Ⅴ層：地山の順であった。

Ⅰ層は白色であり、径2～3cmの白砂を含んだ押所の整備土である。厚さは3cmほどである。

Ⅱ層は、既存の鳥居の基礎を埋め込む際の掘方埋土層である。掘り込みは、深さ1.5m以上の範囲でなされている。北方向を前方としトレンチ上面からみると、掘り込み土は卍字形を呈している。東西方向の掘り込みは、東西の長さ6.0m以上、南北の幅約0.9mであり、南北方向の2本の掘り込みは南北の長さ1.9m以上、東西の幅約1.5mである。

トレンチ東側のⅡ層の下（標高83.7～83.8m付近）からは、東西方向に長い幅0.35cmの木製基礎が検出された。2回前の鳥居（昭和59年に撤去された鳥居）の基礎として用いられたものであると考えられる。木製基礎の断面は半円形であり、複数の部材を接合するためのボルトがついた状態で出土した。木製基礎を



第 21 図 狭城盾列池後陵 調査箇所位置図 (1/1,500)

据えた後に、褐色を基礎とした粘質土ブロックを含んだ粗砂で埋め戻されたようである。なお、Ⅱ層中からは、昭和 59 年の鳥居建替工事箇所の立会調査に際して用いられたと考えられる五寸釘に括りつけられた水糸、調査杭と銅板（制札表面に装着されていた銅板か）が出土した。

Ⅲ層は、表土下に深さ約 1.0 m の範囲で確認される。褐色で粘質土ブロックを多く含んだ土層が検出され、Ⅲ a～Ⅲ i 層の 9 つに区分される。いずれもほぼ水平に積まれている。様々な特徴の色相の土層が入り混じ



ることから、拝所が造成された際に積まれた土層であると考えられる。

IV層は、Ⅲ層下に深さ約 0.5 m の範囲で確認される。灰色の細粒砂と白色の石英ブロックが短い単位で互層となる点が特徴である。後述する V 層（地山層）と比べて層位が安定していないことから、地山層とは区別とし、拝所造成前に形成された土層であると捉えた。

V 層は標高 83.8 m より下で確認される。安定したシルト層であり、粘質土に褐色がマーブル状に混じっている。V 層が地山層であるとするれば、平成 7 年度の事前調査で南渡土堤東側の墳丘側に設けられた第 14 トレンチにおける葺石の基底石の地山が標高約 83.3 m、南渡土堤東の外堤側に設けられた第 23 トレンチにおける地山が標高約 83.6 m であることと比較すると<sup>(8)</sup>、これらよりもやや高い位置から地山層が検出されたことになる。西濠と東濠に設けられたトレンチから検出された地山の比高差からみて、西側が 4 m ほど低くなっていることを踏まえると、自然丘陵の形態が反映されたものとは考えにくい。先述したとおり、平成 7 年度における事前調査の成果からみて、南渡土堤の西裾は後世に築造されたものと考えられるが、南渡土堤の後世の盛土の下には、地山削り出しによる高まりがあったがかった可能性が考えられる。

鶴澤探真画「山陵図」は、各陵墓の文久の修陵前の様相を描いた「荒蕪」図と、修陵後の様相を描いた「成功」図から成る<sup>(9)</sup>。狭城盾列池後陵の「荒蕪」図に描かれた水田の区画からみて、墳丘の東側には元々濠があったと推定できるのであるが、今回の調査箇所である前方部正面は小高く描かれている。

また、『成務天皇御陵図（甲乙）』（宮内庁図書寮文庫所蔵、函架番号：168・131）（図版 14-5, 6）は、文久の修陵前（乙）と後（甲）に描かれた陵墓図であるが、乙の図には、墳丘の周りに田が巡っていたことが記されている。田はいくつかに区切られており、当時の地表面の比高差が推測できる。これをみると、前方部正面には田がなかったようで、小高く描かれている。北渡土堤の部分にもやはり田はなく、橋のように表現されている。

今回の調査結果を考え合わせると、前方部正面中央には濠がなく、原初の南渡土堤のようなものがあったという可能性が考えられる。先述したとおり、北渡土堤は築造当初からのものであり、墳丘の南北に渡土堤があったことになる。この場所は東側から西側への傾斜変換点にあたるため、西濠と東濠の濠底の比高差を解消するために設けられたという可能性が考えられる。奈良県景行天皇山邊道上陵においても同様の地形条件の箇所に渡土堤（C号、I号など）が設けられている<sup>(10)</sup>。これらの渡土堤は、地形に影響を受けやすい濠底の比高差を解消するという機能的目的で設けられたものであると考えられる。

以上のように、過去の鳥居の基礎や掘り込み痕、地山面が検出された。掘削の範囲内では遺構や地山面に影響を及ぼすことはなかったため、予定通りに改築工事を実施した。（土屋隆史）

## 註

- (1) 福尾正彦・佐藤利秀「【陵墓関係調査概要】狭城盾列池後陵整備工事区域の事前調査」『書陵部紀要』第 48 号、宮内庁書陵部、1997 年。
- (2) 図面は註（1）より引用、一部加筆。
- (3) 石田茂輔「昭和五十九年度 陵墓関係調査概要 調査の全容」『書陵部紀要』第 37 号、宮内庁書陵部、1986 年。
- (4) 註（1）に同じ。
- (5) 註（1）に同じ。
- (6) 註（1）に同じ。
- (7) 註（1）に同じ。
- (8) 平成 7 年度の事前調査においても、昭和 62 年に修正作成された陵墓地形図の標高データを使用している。
- (9) 外池昇編『文久山陵図』新人物往来社、2005 年。
- (10) 有馬 伸・土屋隆史「景行天皇 山邊道上陵整備工事予定区域の事前調査」『書陵部紀要』第 68 号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2017 年。



1 トレンチ全景図 (西から)



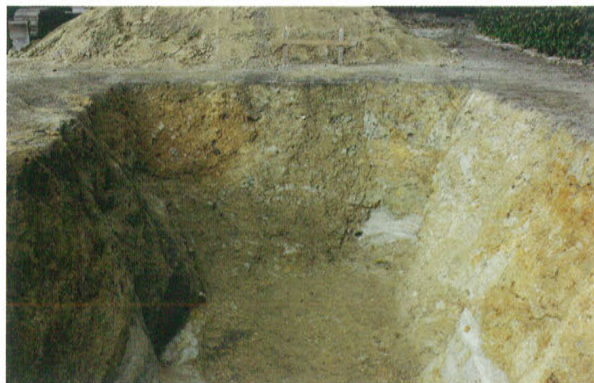
2 木造鳥居撤去後全景 (南から)



3 北壁土層 (東側) (南から)



4 北壁土層 (西側) (南から)



5 西壁土層 (東から)



1 南壁土層（西側）（北から）



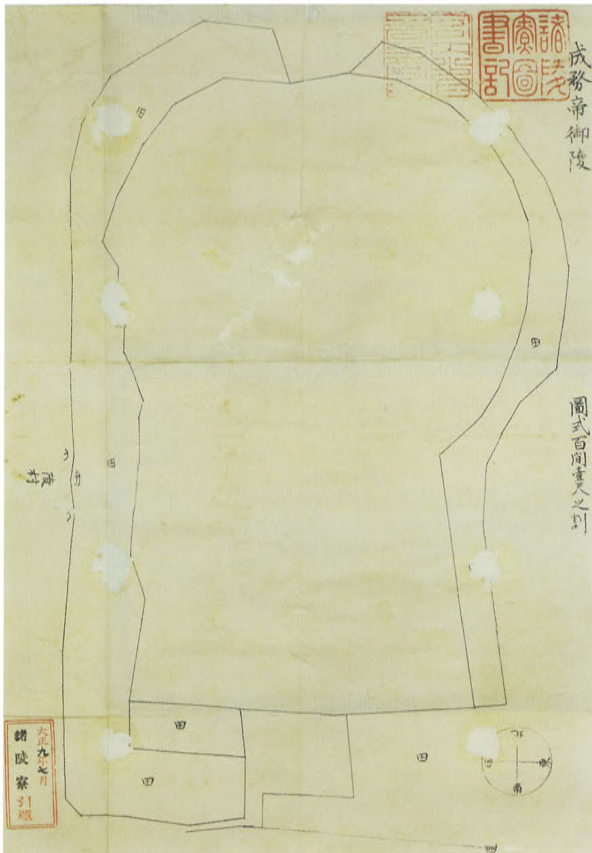
2 南壁土層（東側）（北から）



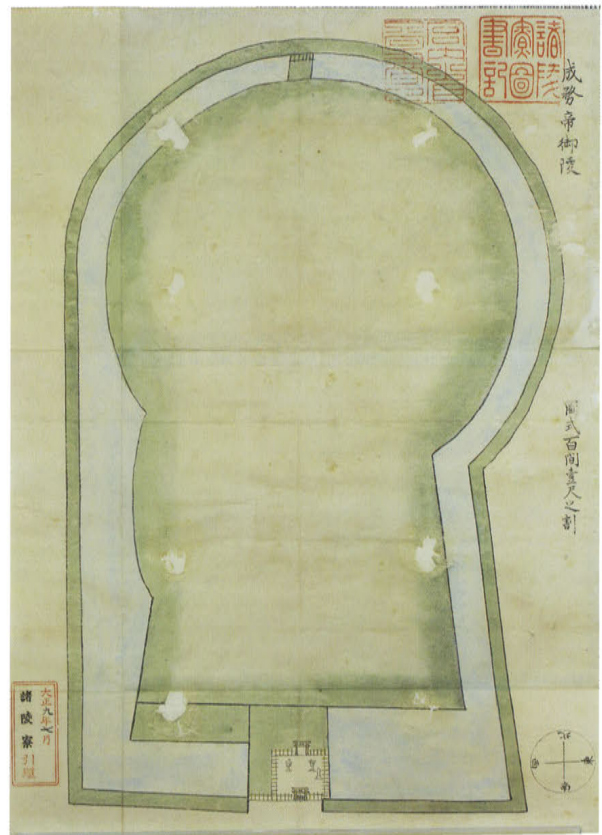
3 東壁土層（西から）



4 木製基礎（南西から）



5 『成務天皇御陵図 乙』



6 『成務天皇御陵図 甲』